夫婦別姓と協調ゲーム

－進化ゲーム理論による検討－

○山本嵩記・中西大輔
(広島修道大学)

目的

本研究は，婚姻時の改姓における男女間の不平等の発生・維持について，社会的な要因を理論的に解明することを目的とした。主に個人の改姓に伴う負担に着目し，不平等な慣習の文化進化モデル (O'Connor, 2019) を基にシミュレーションによる分析を行う。

改姓に伴う負担の代表的なものとして，手続きのコスト (内閣府男女共同参画局, 2021) が存在する。研究者や経営者など氏名が業績と直結する職業では，改姓により連続性が失われるなどの不利益が生じる (西村・小野田, 2021)。これらは主に女性が負担しているという報告もある (経団連, 2024)。

O'Connor (2019) は性別役割分業の発生について，協調ゲームを用いた検討を行った。協調ゲームとは，複数の個人が互いに行動を調整することで利益を得られる状況を定式化したものである。

現在の日本では婚姻時に夫婦のどちらか一方が改姓する必要がある。これは一方が「改姓する」，他方が「改姓しない」という異なる行動の組み合わせによって婚姻が成立する状況であり，補完的協調ゲームに該当する。この状況では改姓する側のみが負担を負い，改姓しない側は負担を負わないという非対称性が存在する。

本研究では，この補完的協調ゲームを用い，非対称的な負担構造が不平等な姓慣習の発生・維持にどのような影響をもたらすかを検討する。

方法

本研究では，夫婦の姓選択における慣習の発生・維持メカニズムを，進化ゲーム理論を用いたシミュレーションによって分析した。

シミュレーションの設定　男性集団と女性集団という 2 つの集団を想定する。各個人は「改姓する」または「改姓しない」という選択肢を持つ。個人は異なる集団の個人とランダムにペアを組んで相互作用し，協調の結果に応じて利益を得る。その後，個人は同じ集団内で，よりよい利益を得た個人の行動を模倣する。このプロセスを繰り返し行うことで，各集団における「改姓する」行動の割合がどのように変化するかを調べた。

状況の設定　日本の現状である改姓が求められるシステムと夫婦別姓が認められているシステムという 2 つの制度状況を想定する。加えて，それぞれの状況において配偶者同士で同じ姓にしたいという好みのパラメータを考慮しない場合と考慮する場合の 2 パタンを設定し，合計 4 パタンの分析を行った。

現行制度における状況（補完的協調ゲーム）　各個人は「改姓する」または「改姓しない」という 2 つの行動の選択肢を持つ。婚姻が成立するためには，一方が改姓し，他方が改姓しないという組み合わせが必要となる（Table 1)。右表のパラメータ α，β は男女それぞれのプレイヤーが同姓を好む程度を表す。α，β はそれぞれ 0 以上 3 以下の値をとるとする。

Table 1 現行制度における状況の利得表

Player 1 \ Player 2	Change	Keep
Change	0, 0	1, 2
Keep	2, 1	0, 0

Player 1 \ Player 2	Change	Keep
Change	0, 0	1+α, 2+β
Keep	2+α, 1+β	0, 0

夫婦別姓が認められる状況　互いに「改姓しない」という選択をとっても婚姻が成立する (Table 2)。

Table 2 別姓が認められる状況の利得表

Player 1 \ Player 2	Change	Keep
Change	0, 0	1, 2
Keep	2, 1	2, 2

Player 1 \ Player 2	Change	Keep
Change	0, 0	1+α, 2+β
Keep	2+α, 1+β	2, 2

結果・考察

現行制度における状況では，現状の姓慣習が維持されやすい。また，同姓を好む程度が相対的に高い集団の個人は改姓を行いやすいことが観察された。これは夫婦別姓が認められる状況でも同様である。

女性が改姓を行うことが多い現状では，その慣習が維持されやすいことが示唆される。男性の方が同姓を好む傾向が大きくなれば ($\alpha > \beta$)，男性が改姓するケースが増えると考えられる。

社会が選択的夫婦別姓制度を導入したとき，同姓を好む傾向（α，β）が低い場合，両者とも改姓しないケースが増える。しかし，互いに同姓への選好が強い場合，一方が姓を変更するという慣習が維持される。制度導入の際，同姓への選好の程度が姓慣習の変化には重要な要因となることが示唆される。